

母との勝負と一つの楽しみ

鎌ヶ谷市立第五中学校 三年 大島 晃陽

「おかわりよ」

そう僕が言うのと、僕の勝ちです。

「もうお腹いっぱい。ごちそう様でしたよ」

そう僕が言ってる、一粒のお米でも残してしまふと、母の勝ちです。

僕と母の夕飯はただの食事ではなく、勝負をしているかのように、毎日行われています。僕が中学生になつてからの出来事です。成

長期の僕は大抵だが、母が作ってくれる夕飯に量の物足りなさを感じ、何度か母にそのことを口に出して伝えていました。するといつの日にか、ご飯の量があきらかに増え、物足りなさを感じなくなり、作ってくれるものを残してしまう事も少々ありました。そして、その頃から、夕飯を少しでも残すと、

「今日は母ちゃんの勝ちだね」

と、勝手に僕と勝負しているかのように母は笑顔で言ってきました。この母親の笑顔の裏

に思惑が隠されていて、僕はその思惑通りに
な。てしま。ていたのではないかと思。てい
ます。

僕は、せ。かく僕のことを思。て作。てく
れた夕飯を残してしま。たという罪悪感と共
に、母に負けてしま。たという敗北感を一回
の食事で覚えました。そう、これこそが母の
思惑だ。たのです。少しでも多くの量を摂取
してもらおうと、罪悪感にプラスして負けが
嫌いで素直な性格を知る母は敗北感を手えよ
うと考え、ご飯の量から、おかしの量を増や
してくれました。

僕はこの母の思惑に気づいたとき、とても
嬉しか。たです。何故なら食べ切。た時に、
満腹感と、母に勝。たという嬉し。さ、そして
なにより、母の嬉し。そうな表情を見れたから
です。また、食事にゲーム性が生まれ、食事
をあることがさらに楽しくなりました。

母は毎日夕飯を一人で作。てくれています。
それも仕事から帰。て来。た後で、疲れている

はかなのに、そんな表情をほとんど浮かべる
ことなく、

「おまたせ。遅くな。てごめんね。」

とまで言ってくれます。そんな母に、どこで
感謝を伝えようかと考えたり、作ってくれた
ものを全て食べ切る事だろうと思いましたが、
僕は中学三年生、兄は高校三年生で夜遅くま
で塾に通い、父は仕事で一番遅くに帰宅する
ことが多く、なかなか家族全員で食卓を囲む
ことは叶わなくなりました。家族で談笑する
楽しみがなくな。た一方で、こうして母の笑
顔を食事を通して見ることができるのは、一
つの楽しみとな、ています。

僕はいつも、満足させる気で夕飯を作、て
くれる母に感謝すると共に、お米そのものを
毎日、思う存分食べられていることに感謝し
たいです。『米の国』に生まれることができ
たから、お米を食べるといふことが習慣化さ
れ、毎日のように美味しいご飯とそのお共た
ちを食べることができているのだと思えます。

ましてや、ご飯を三食食べれない子どもたちも、この世界にいたることは事実であり、その人たちの事も時には思いながら米一粒までも残さず食べるのが大切である。

僕はあバリまえにお米を食べられること、食事ができることに感謝して食べ進めると共に母に毎日勝つことができるように作ってくれたものを全て食べ切ることと頭の片隅に置いて、今日も夕飯を食べたいと思います。またこの気持ちも大人になっても忘れることがないようにし、いつか自分が家族を持つたときも楽しい食事にできるように、一日の一つの楽しみとなるようにしたいです。